

比較を通して美術評論文の特徴・工夫を考える
——「君は『最後の晩餐』を知っているか」(中2)を中心に——
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校／横浜国立大学教職大学院・院生

柳屋 亮
横浜国立大学 石田 喜美

キーワード：美術評論文，比較，

1. はじめに

平成29(2017)年版中学校学習指導要領では、中学2年生の指導事項に「観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること」(〔思考力・判断力・表現力等〕C「読むこと」エ)が設定された。平成20(2010)年版と比較すると平成29年版では「観点」の明確化とそれに基づく複数の文章の比較が求められていることがわかる。光村図書によって発行された中学2年生用国語教科書『国語2』ではこれを踏まえ、布施英利「君は『最後の晩餐』を知っているか」に加え藤原えりみによる「解説」を掲載した。つまり《最後の晩餐》という美術作品に対する評論文(以下、美術評論文)と同作品の解説とを比較しながら美術評論文を分析的に読むことができる。ではある美術作品について書かれた複数の文章を比較することで美術評論文について理解するとはいかなることか。

守田(2015)は「評論」を「評論は、ものごとに対するより望ましい(より完全な/より正しい)評価を論証することによって、その評価に読者を同調させようとする文章である」(守田2015, p136)と定義し、「論説」と「評論」には「ある事象とそれに対する一般的ではない見解や評価が論理的、説得的に表現されるという共通の特性がある」(同上)と述べる。美術評論文は評論(文)のうち、美術作品を対象として書かれたものである。そのためそこにはその美術作品に対する「一般的ではない見解や評価が論理的、説得的に表現される」と考えられる。森村(2011)は「…重要なのは、『なにが美であるのか』ではなく、『なにが美でありうるか』を問うことだと思うからです」(森村2011, p270)と述べ、人々が抱くさまざまな『美しい』を語りあい、意見交換しあうことの重要性を指摘する(同上 p284)。「一般的ではない見解や評価」を示そうとする美術批評文の意義は、ここにあるといえるだろう。坂東(2020)は『見る』と『見ること』レベルの整理(試案)

に基づき布施評論の教材分析を行い、本教材が「『見えるものと言葉とを対応させる』レベル1」に始まり、対話型鑑賞で用いられる問いを用いながら自問自答するスタイルで本文が書き進められていると指摘する(坂東2020, p.8)。これを踏まえれば、布施評論は、布施自身が美術作品を目にした体験の言語化を始点とし、それを「一般的ではない見解や評価」として示しつつ、それを分析的に言語化していくことで読者を説得する美術評論文と位置付けられる。

2. 教材について

本授業ではレオナルド・ダ・ヴィンチ作《最後の晩餐》の魅力について書かれた5つの文章を扱った。以下、各文章の特徴・工夫について紹介する。

①布施英利(2021)「君は『最後の晩餐』を知っているか」(布施評論A)

筆者はレオナルド・ダ・ヴィンチ作《最後の晩餐》を「かっこいい」と評価し、その要因の一つとして作品に見られる科学的な技法を用いていることを挙げ、3つの技法について具体的に説明する。また作品の修復により、「画家の意図」が見えてくるようになったことも「かっこいい」と評価できる要因として挙げている。

表現の特徴は、「～だろうか」などと読者に問いかける表現を多用することで、読者に自分の考えをもたせ文章を読むきっかけを作っていることだ。また、主張として「かっこいい」という誰もが知っている抽象的な言葉を用い、読者が作品や筆者の主張について考えをもてる文章になっている。

②藤原えりみ(2021)「レオナルド・ダ・ダヴィンチ作『最後の晩餐』の新しさ」(藤原解説)

レオナルド・ダ・ヴィンチ作《最後の晩餐》のどこに新しさがあるかについて説明している文章である。説明のために、他の画家が描いた《最後の晩餐》との比較を行い、それによって本作品が構図の新しさと現実の情景を描いたことの新しさという2つの新しさを持つことを示す。作品の魅力については最

後に「その新しさと人々を驚かせ、魅了したのだ。」とだけ述べる。文章の種類は「解説」とされている。そのため、筆者が作品を見て感じた感想や評価はほとんどない。文末も「た」「ている」「だ」など事実を表すような表現が多く、レオナルド・ダ・ヴィンチ作の《最後の晚餐》の新しさを説明することに主眼を置いていることがわかる。

③布施英利(2005)『『最後の晚餐』、遠近法の秘密』(布施評論B)

布施評論Aと同様、レオナルド・ダ・ヴィンチ作《最後の晚餐》を「カッコいい」と評価し、その根拠として遠近法とその効果を挙げる。また修復により、遠近法の効果が現れてくるとも述べる。《最後の晚餐》を「カッコいい」と評価する点は同じだが、布施評論Aが3つの技法に着目して説明していたのとは異なり、布施評論Bでは「遠近法」に焦点化して作品の魅力について述べている。

④齋藤孝(2009)『ダ・ヴィンチーあり得ないものをリアルに描いた天才』(齋藤評論)

筆者はレオナルド・ダ・ヴィンチを「うまい」と評価する。その根拠として《最後の晚餐》に現実ではありえない「時間」と「空間」を描きながらも見る者にはそれを自然に感じさせてしまうことを挙げ、これについて説明する。また、「手」や「表情」を詳細に描くことで人物に実在感をもたせるとともに、その人物の精神性まで込めて表現し、見た者にもそのことを感じさせるところも「うまさ」の特徴のひとつであるとする。

最後に、「彼の絵は、画家が本質を捉えようという思いを超えて突き詰めていった果てに出会った、新しい絵画のビジョンなのかもしれ」ないとレオナルド・ダ・ヴィンチの作品について結論づける。

⑤高階秀爾(2014)『『最後の晚餐』はなぜ傑作か？—レオナルド・ダ・ヴィンチの一部』(高階評論)

一章分の文章のうち、レオナルド・ダ・ヴィンチ作《最後の晚餐》がなぜ傑作とされるのかについての説明に関わる部分(①「臨場感とまなごしの自然な誘導」②「静的な構図と動的な描写」③「不幸な歴史」④「《最後の晚餐》はなぜ傑作か?」)のみを抜粋し教材として用いた。

①では、遠近法を用いて実際に「最後の晚餐」に参加しているような臨場感があることやイエス・キリストの顔に自然と目がいつてしまうことなど、作品の描かれ方について述べる。②では、全体の構図

やイエス・キリストの静的な構図と使徒たちの動的な描写を対比的に描くことで、イエス・キリストの内面の静かさと使徒たちの内面の動揺との対比をも表しているとし、作品の構図と描かれる人物の描写の特徴について述べる。③では、作品が剥落しやすい方法で描かれたこと、作品が様々な要因で大きく損傷したことを挙げ、作品がたどった「不幸な歴史」を説明する。そして④では、この作品が傑作であるのは、新約聖書の物語が表れているからだけでなく、「画家の深い信仰心」と「神への愛」によって描かれた目に見えない「イエスの心の物語」が表れているからであるとし、レオナルド・ダ・ヴィンチの内面が表れていることにこの作品の素晴らしさがあると結論づける。

3. 授業の概要

本授業の構成を表1に示す。

表1 授業の構成(全6時間)

次	時	学習内容
1	1	1) 《最後の晚餐》に関する説明を聞く 2) 実物大で投影された《最後の晚餐》を鑑賞 3) 布施評論Aを読み、文章の良さ・工夫などについての感想を書く(初発の感想)
	2	4) 藤原解説・齋藤評論・布施評論B・高槻評論を読み、布施評論Aと比較する文章を選ぶ
2	3	5) 選んだ文章同士と布施評論Aを比較し《最後の晚餐》の魅力伝えるための工夫や文章の特徴が示された箇所を表にまとめる
	4	6) 表を見ながら両文章の特徴・工夫の違いを考え、比較の「観点」を定める
3	5	7) 定めた観点到に着目して2つの文章を比較し、
	6	布施評論Aの特徴・工夫について自分の考えを文章でまとめる

なお本授業のねらいは布施評論Aの文章構成上の特徴や表現の工夫に関する考えを形成することであるため、第2次第4時での「観点」の設定(6)においては布施評論の特徴・工夫が顕著に表れていると考えるところを「観点」として定めさせた。

さらに「観点」を定める際には、布施評論Aと比較対象として選定した美術評論文との違いが、文章全体の趣旨や筆者の意図とどのように関係しているかを考慮することを促した。そのねらいは、生徒自身が見いだした両評論文の違いを、筆者自身が美術評論文を書くに至ったねらいやその意図と関連づけながら、生徒自身に考えさせることにある。

4. 授業の実際

4. 1. 比較対象とする美術評論文の選定(第1次)

はじめに、教科書掲載の布施評論Aについて、その文章の良さや工夫について気づいた点を記述するよう求めたところ、生徒たちは説明的文章の構成に関するこれまでの理解に基づき、その特徴を見出していた。具体的には「意見」を支える「根拠」のわかりやすさ（「レオナルドが学んでいたことから絵のすごさを語る→根拠が明白」）や、「意見」と「根拠」を結ぶ付けるための構成（「文章構成が紹介→意見→根拠→意見」）に着目するもの、「問いかけのような口調」など読者を説得するための表現上の工夫に着目したものが多く見られた。

一方、布施評論Aと、布施評論B、藤原評論・斎藤評論・高階評論を読み比べ、比較する文章を選ぶ段階になると、「意見」のみ、「根拠」のみに着目しその相違について論じようとする生徒が多く見られた。例えば生徒I（当日資料1参照）は比較対象に布施評論Bを選んだ理由を「文章A（布施評論A）の主張は作者は全体を描きたいのに対して、文章E（布施評論B）では遠近法のかっこよさを主張していたから。同じ作者の主張の違いに着目したい。」

（下線は引用者）と記述した。また、生徒II（当日資料2参照）は比較対象に斎藤評論を選んだ理由を「A（布施評論A）の文章と比較してみたところ、捉え方を変えると結論が同じ。その点から根拠等の違いを比較したらおもしろいと思った。」と記述した。生徒Iは「意見」の違い、生徒IIは「根拠」の違いに着目している。この他にも「構成」や「表現」「図」に着目して比較しようとしている生徒もいたが、いずれにせよ多くの生徒たちは初読時に見出した特徴・工夫と関連させて比較対象を選んでいった。

ここで注目しておきたいのは、比較対象を選ぶ理由として、特徴・工夫の考えやすさを挙げるだけでなく、生徒IIのように、比較することに対し「おもしろい」という感情を抱いたことを示す記述があったことだ（当日資料2参照）。複数の美術評論文の存在は、生徒自身による発見およびそれに伴う感情の動きを生じさせている。

4. 2. 比較するための「観点」の抽出(第2次)

前述したように、生徒たちは比較対象を選ぶ段階で、「主張」や「根拠」の違いなどに着目していた。第2次で生徒たちは、教材対象選定の際に見出した違いを出発点としながら、他の生徒とも交流するこ

とで、さらに他の見方を探っていった。これによって比較のための「観点」を複数設定し、それらの中から、布施評論Aの特徴・工夫をもっとも顕著に見出せるような「観点」を定めていった。

このような「観点」の拡張と選定が行われるプロセスを、生徒IIIの事例をもとに記述してみたい。生徒IIIは、比較対象として藤原評論（教科書掲載）を選んだ生徒である（当日資料3参照）。生徒IIIは比較前には「絵の用途の違い」に着目して比較しようとしていた。布施評論Aでは、文章内の図像としてレオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》のみが掲載されているのに対し、藤原評論では他の芸術家による《最後の晩餐》の図像も掲載されているため、それらの図像がいかなる「用途」で用いられているかを比較しようと考えたのであろう。

しかし生徒IIIは、比較のための「観点」を、「言葉遣い」「立場」「活用方法」へと拡張させたのち、最終的に「表現（述べ方）の特徴」を、文章比較のための「観点」として選定した。ではなぜ生徒IIIは「表現（述べ方）の特徴」を最終的な「観点」としたのであろうか。ワークシートの記述を見ると、「活用方法」という観点の発見が、「絵の用途の違い」から「表現（述べ方）の特徴」へと結びつけるための補助線となったことがわかる。ワークシート内の記述から推測すると、ここで「活用方法」とは、文章内における図像の活用方法を意味する。生徒IIIは、これについて次のように記述している。（表2）

表2 生徒IIIによる「活用方法」の比較

布施評論A	文だけだと伝わりにくから絵などととも
藤原評論	文では簡潔に書き、絵や表で不足部分を補っている

生徒IIIはすでに、引用される図像（「絵」）の「用途」が異なることには気づいていたものの、「活用方法」という「観点」によって、その違いが「文章の内容をわかりやすくするもの」という点では同じようなものであったことに気づいた。その結果「表現」の方に布施評論Aの特徴・工夫が顕著に表れていると考え、最終的に「表現（述べ方）の特徴」を、文章比較のための「観点」として選定したのであろう。

4. 3. 筆者の立場で特徴・工夫を考える(第3次)

最後に、生徒自身が設定した「観点」から見出される2つの美術評論文の違いに基づき、布施評論Aの特徴・工夫を整理させた。「観点」の設定の際には、布施評論Aと比較対象として選定した美術評論

文との違いが、文章全体の趣旨や筆者の意図とどのように関係しているかを考慮することを促したため(3.2.)、多くの生徒たちは、筆者の意図と関連させて記述を行っていた。

例えば、生徒I(当日資料1参照)は、布施評論A・Bを比較するための「観点」を「根拠」に定めた。これらは、筆者が同一であり、その結論も《最後の晚餐》が「カッコいい」という同一のものであることを挙げつつ、布施評論Aが「解剖学、遠近法、明暗法などの科学的な視点から絵を分析してレオナルドの意図を考えている」のに対し、布施評論Bでは絵の内容だけではなく、遠近法の効果についても深く分析しレオナルドの伝えたいことを考えている」という違いについても記述している。生徒Iは、この比較に基づき、同一の筆者が記した2つの美術評論文の違いがいかなる意図によって生じたかについても考察している。生徒Iは、布施評論Aについて「科学的な根拠を多く使うことで説得力を高めようとしたのではないか。」、これに対し布施評論Bは「『遠近法』というフレーズを繰り返し使うことで、レオナルドが伝えなかった遠近法のかっこよさを強調させようとしたと考える」と結論づけている。

また、布施評論Aと高階評論と比較した生徒IV(当日資料4参照)は作品が描かれた視点に着目し、観点を定めた。この観点について、布施評論Aでは、レオナルド・ダ・ヴィンチが用いた技法に着目して作品を価値づけているのに対して、高階評論では、作品の歴史やこれまで残っていることの素晴らしさ、作品の影響に着目して作品を価値づけていることを指摘し、作品を価値づける筆者の視点の違いを見いだしている。そして、このような布施評論Aは「ダ・ヴィンチの工夫しようとして苦心している姿が想像できること」を可能にしていると述べ、筆者の作品の見方に立って布施評論Aの特徴・工夫について考えている様子が見える。

5. 成果と課題

「一般的ではない見解や評価」とは、言わば、マイノリティの見解や評価といえる。一般に流布する支配的言説には見られない見解や評価を提示することには困難が伴うが、それでも、自分が見た芸術作品の姿やその価値を説こうとするところに美術評論文の意義がある。本実践では、生徒たちが自ら「観点」を定め、そこから見出される複数の文章の姿を整理・分析するとともに、さらに各文章を書いた筆

者の立場からいかなる意図によってそれらの違いが生じたのかを捉え直した。これによって生徒たちはマイノリティ側から見える世界を読者に届けようとする筆者の姿を想像し、そこから「カッコいい」という語が選択された理由や、それを支える具体的な事実の選ばれ方を考えた。

松下(2021)は、ダイアログ(対話)の視点の導入によってトゥールミン・モデルを拡張した「対話型論証」モデルを提案している。「対立する主張・異なる主張」との対話から「結論・提言」が導かれることの示すこの論証モデル(松下 2021, p60)は美術評論文における論証を考える際にも有用である。マイノリティ側の見解や評価を提示し、読者を説得しようとする文章の場合、このモデルの対話的な側面を重視しながら、マイノリティがいかに自身の意見を届け、読者との共感的な対話関係を構築しようとするかに焦点を当てる必要があるだろう。

本実践では、文章全体の趣旨や筆者の意図を考慮した「観点」の設定が、そのような焦点化を可能にすることを見出した。今後はこの仮説に基づき、筆者の立場に身を置くことを軸にした実践の開発を行っていききたい。これについては今後の課題とする。

文献

- 斎藤孝(2009)『斎藤孝のぞっくり!美術史』祥伝社
高階秀爾(2014)『ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」はなぜ傑作か?: 聖書の物語と美術』小学館
坂東智子(2020)「言語化能力と連動する『見る』力の系統的な育成: 君は『最後の晚餐』を知っているか(中2)」, 解釈, 第55巻5/6号, 2-11.
藤原えりみ(2021)「解説 レオナルド・ダ・ヴィンチ作『最後の晚餐』の新しさ」甲斐睦朗ほか編『国語2』光村図書出版, pp. 180-181.
布施英利(2005)『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』筑摩書房.
布施英利(2021)「君は『最後の晚餐』を知っているか」, 甲斐睦朗ほか編『国語2』光村図書出版, pp. 170-179.
松下佳代(2021)『対話型論証による学びのデザイン: 学校で身につけてほしいたった一つのこと』勁草書房
守田庸一(2015)「論説・評論」高木まさきほか編『国語科重要用語事典』明治図書出版, p136.
森村泰昌(2011)『「美しい」ってなんだろう?: 美術のすすめ』イースト・プレス